



# ミリキタニの猫



戦争に翻弄され、路上生活を余儀なくされながらも猫を描き続ける80歳の画家、ジミー・ミリキタニ。今、一人のアメリカ人女性が彼を追ったドキュメンタリー『ミリキタニの猫』が世界の映画祭で絶賛され、この日系人アーティストに静かな注目が集まっている。 Text by Miki Takahashi

## 9・11、混乱の中で

2001年9月11日、世界貿易センタービル爆破テロ直後のニューヨーク、ソーホー。大混乱の中、舞い散る粉塵に咳き込みながらも黙々と絵を描き続けるホームレスの画家、ジミー・ミリキタニ。そんな彼を見るに見かねて自宅へ招き入れたのが、彼から猫の絵をもらい、交換条件として彼を撮影していた監督、リンダ・ハッテンドーフだ。そこから始まった共同生活により、彼の人生は大きな転機を迎える。

## 痛ましい過去

アメリカに生まれ、3歳で母の故郷広島に戻ったミリキタニ。しかし18歳の時、海軍学校への入学を拒否、アメリカ国籍も持つ彼は「死ぬのは怖くないが私は軍人じゃない、アーティストだ」とアメリカでの芸術活動を決意し、渡米。しかし、第二次世界大戦中に日系人強制収容所に送られ、不当な扱いをした政府に抵抗して何千人もの人々とともに自ら市民権を捨てた。

## にいちちゃん、日本の猫を描いて

いしこりが溶けアメリカという国と自らの過去を受け入れていく様子が映画では丁寧に描かれている。

また、何より魅力的なのは、ミリキタニという人物だ。リンダの帰りが遅いと本気で心配して彼女を叱ったり、電子レンジだとうどんが温まらないとワガママを言うミリキタニは、頑として自分の意志を貫き通す一徹者でありながら、人情家でマイペースでどこか憎めないお爺ちゃんなのだ。



©2006 LUCID DREAMING INC. ALL RIGHTS RESERVED

ミリキタニの描く絵は、ツールレークの収容所や故郷と愛する人を焼き尽くした広島原爆、その広島で子ども頃よく食べた柿、そして猫だ。中でも猫の絵は特に人気だという。猫を多く描くようになったのは、ツールレークに収容されていた頃自分を慕っていた猫好きの男の子に、「にいちちゃん、日本の猫の絵を描いて」とよくせがまれたからだという。当時、収容所内では病死や自殺な

## ミリキタニの猫

リンダとの出会いを機に、生活保護を受け住居も得られることとなったミリキタニ。映画の最後では、ニューヨークのアンマルシエルターからもらってきた猫のニコとの新しい生活も始まった。

偶然リンダが猫を飼っており、ミリキタニの描いた一枚の猫の絵を手にしたことからすべてが始まった映画『ミリキタニの猫』。この作品には、ハリウッド映画のような華やかさは微塵もない。しかし、どれだけ巨額を投じても出すことのできない、ジミー・ミリキタニという一人の人間のひたむきな生き様から滲み出るカッコよさと重厚感がある。彼が描く猫は、何かすべてを静観するかのよう大きな瞳でこちらを見つめている。また、静かに目を閉じ平安な表情で眠る猫は、幼くして亡くなった少年と多くの同胞への鎮魂の祈りを投影しているかのように見える。

この映画を見終わった後、もう一度彼の描いた猫を見た時、多くの人が胸を打たれずにはいられないだろう。



## THE CATS OF MIRIKITANI 猫

●監督:リンダ・ハッテンドーフ ●配給:パンドラ (2006年/アメリカ/74分)

2006年東京国際映画祭

「日本映画・ある視点」部門最優秀作品賞受賞

2006年トライベッカ映画祭観客賞受賞ほか多数受賞

2007年9月8日、ユーロスペースほか全国でロードショー!

「ミリキタニの猫」マスコミ用プレスシート(非売品)を5名様にプレゼント



P02